短編

オセロー

山中與隆
YAMANAKA TOMOTAKA

Duo-Yamanka

オセロー

中山俊文

目次

オセロー～ある友人の死～　1
編者あとがき　52

オセロー～ある友人の死～

中山俊文

「君のことだから、演奏会用序曲『オセロー』という曲をもちろん知っていると思います。君の大好きなドヴォルジャークの作品ですからね。長大な交響曲などと違って、これは十三分くらいのオーケス

トラ曲ですが、音楽の美しさとはこのことかと思うほどです。いまの僕にはこの曲ほど心に響いてくる音楽はないのです。よく晴れた秋の午後など、西に傾いていく陽の光をいっぱいに受けた風景を、窓から眺めながら聞いていると、時間とともに微妙に色を変えていく空が、雲の一切れが、風に揺れる枯れ草が、太陽の光を受けて光る木の幹が、そしてねぐらに帰り遅れたカラスが一羽風景の中を横切って行

くのが・・・そう、それらの全てがこの音楽に見事に調和するのです。僕の心は響きが送り込む風に震えます。

実はこの曲を聞いているとき、僕はある人の死を思い浮かべてしまうのです」

私が、永瀬からこのような謎めいた言葉で結ばれる手紙を受取ったのは、彼が亡くなる前の年の秋だ

った。永瀬と私は大学時代に音楽サークルで一緒に活動して以来、四十年以上の付き合いであった。

彼の死とその手紙、そして『オセロー』はそれ以来私の脳裏から離れない。私は前からこの曲を知っていたし、いい曲だとは思っていたが、それほど特別な感情を抱いてはいなかった。彼がいうように、私はドヴォルジャークの音楽が好きなのだが、むしろ『オセロー』以外の曲に惹かれるものが多かった。

しかし、彼から手紙を貰ったときにあらためて聞き、さらに彼の死をきっかけに繰り返し聞くうちに、『オセロー』は私にとっても特別な音楽になっていった。

永瀬が亡くなったことは、海外の出張先に家内が電話で知らせてきた。ちょうど私は大きな学会に出席していてすぐに帰国することも出来ず、葬儀には家内に出てもらった。私は約一か月後に帰国してか

ら彼の家に線香を上げに行った。

そのとき永瀬の奥さんが、私だけにといって打ち明けたことは、私の心を凍りつかせるような事実であった。

奥さんによると、永瀬は前年の秋ごろからなにもせずにぼんやりしていることが多くなり、ヘッドホーンで音楽を聞くだけの生活が続いていたそうである。彼は、いくつになってもあくせく働いている私

と違って、六十の停年を待つようにして現役から退き、何か書き物をしたいといっていた。

「永瀬が聞いていたのは、もしかしたら『オセロー』という曲じゃないですか」

私は手紙のことを思い出して訊ねてみた。

「そうかもしれません。主人が亡くなったあとプレーヤーにはその曲が入ったままになっていましたから。家では主人以外そのプレーヤーで聞くものはい

ませんでしたし、主人はいつもディスクはきちんと整理していたので、それがプレーヤーに入れたままというのはちょっと意外でした。入れ替えずにそればかり聞いていたのかもしれません」

「やっぱりそうでしたか」

「どうして、主人が聞いていた曲をご存知なのですか」

そばで一緒に暮らしていた自分が知らないことを、

遠くに住んでいる私が知っていたのを奥さんは不思議に思ったのだろう。

「去年の秋でしたか、私は永瀬から手紙を貰ったのですよ。それに『オセロー』に魅せられてそればかり聞いているというようなことが書いてありましたから」

私は、ある人の死について触れられた手紙の最後の部分については奥さんに話さなかった。

「そんなことがあったのですか。わたくしには何を聞いているかなんて、話してはくれませんでした。ただ、ぼんやりと窓の外を見ながらヘッドホーンをつけて聞いていましたから。そういえば、そんなときの主人は何となく寂しそうに見えました。でも、いまだからそんな風に思うのかもしれません。なにしろ定年後の主人は、いつも長い時間ひとりで音楽を聞いていましたから、そのときは特にそんな見方

をしなかったような気がします。何か音楽について書くために聞いているのだろうくらいにしか思いませんでした」

「話の腰を折ってしまいましたが、亡くなったときのことでしたね」

「ええ・・・自殺でした」

聞き取りにくいほど小さな声だった。二人とも黙ったまま長い時間がたった。奥さんはうつむいていた

が、そっとため息を漏らしてから窓の外に眼をやった。その目には涙がいっぱい溜まっていた。私も窓の外を見た。そこには、永瀬が『オセロー』を聞きながら眺めたと書いていた風景があった。季節は移っていたが、間違いなく彼が手紙に書いていた風景である。私は、突き上げてくるものに堪えることができず、声とともに涙をこぼしてしまった。

それにしても、葬儀に出席した家内は何もいって

いなかった。家内も自殺などとは聞かされなかったのだろう。

私は何か自分の方から言葉を発しなければならないような気がして、ありきたりとは思ったが、

「遺書みたいなものはあったのですか」

と訊いた。永瀬はロマンティックなところのある男ではあったが、よほどの理由でもないかぎり自殺したりするはずがない。しかし、あの手紙の最後のこ

とが何か関係あるのだろうか。
「ええ、私物の処分のことなど・・・」
奥さんは、しばらく言葉を切ってから、
「詳しくは書いてないのですが、病気に罹っている
とありました。たしかに最後のころはずいぶんと痩
せていました。心配して聞いても、『運動も何もしな
い老人はこんなものさ』といって、取り合いません
でした。ご存知のように、もともと痩せていました

し・・・でもそれが原因だったのでしょうか・・・・それからわたくしに、残りの人生を充実して暮らして欲しいと・・・・」

奥さんは、とぎれとぎれにそこまでいうと、こみ上げてくるもので言葉をつまらせた。しかし奥さんは間をおいてから、気を取り直したように、

「あれは天気のいい夕方でした。ちょっと散歩をしてくるといって普段着のまま出かけて、そのまま帰

ってこなかったのです。
わたくしが、『まだ夕方は寒くなるから、ジャンパーを着て行った方がいいわよ』といって渡したら、『うん』と答えて私からジャンパーを受け取ったのが、わたくしたちの最後の会話でした」
奥さんはもう泣かなかったが、そのときのようすを思い浮かべているようであった。それからまた、話の続きを始めた。

「暗くなっても帰ってこないので、わたくしは通りに出て見たり、近くの知り合いに電話したりしましたがわかりませんでした。近所の人たちが一緒に探してくれました。とうとう町の駐在さんまで、主人が散歩していたと思われるコースをくまなく探してくれました。わたくしは、連絡が受けられるように家で待っていることになりました。しばらくして新たなパトカーが来たのか窓の外を、赤色灯をちらち

らさせながら通り過ぎるのが見えました。サイレンは鳴らしていませんでした。

夜の九時近くなって、裏山の林の中で主人が発見されたのでした。家から歩いて三十分もかからない場所で、わたくしも主人と散歩したことのある道の近くでした。現場から迎えに来てくれたお向かいのご主人の車で、わたくしが駆けつけたときには、主人はもう木から下ろされて、毛布がかけられていま

した。その場には、いつ来たのか救急車も止まっていました。駐在さん以外の警察官の人や救急車の人、それに近所の人たちがたくさん集まっていました。『ご主人かどうか、確認していただけますか』と駐在さんがいったとき、わたくしは主人ではないことを願いましたが、めくられた毛布の下にあったのは、やはり主人の顔でした」

奥さんは一呼吸おいて、

「そのとき主人のそばに引越し用の白いロープがあるのに気がつきました。主人が散歩に行くといったとき、すでにポケットにはそのロープが用意されていたのです」

奥さんは、淡々と話した。むしろ私の方が動揺して、体の震えが止まらなかった。私は、夜の林の中で懐中電灯に照らし出された永瀬の顔を想像した。きっとその目は堅く閉じられ、見たこともないような顔

色になっていたことだろう。もしかしたら、もっと異常な様子だったのかもしれない。奥さんはいったいどんな気持ちで永瀬の顔を確認したのだろうか。しかし、いま奥さんは、夫の死の状況を私に話すことで、張り詰めた心の内圧を下げているようにも見えた。

それ以来私は沈みがちな気持ちが続いて、なかな

か仕事にも集中できないでいたが、それでも少しずつ日常の忙しさにまぎれて、普段の生活にもどっていった。

しかし、それからさらに半年近く経ったころ、永瀬の奥さんから分厚い手紙が届いた。手紙が分厚いのは、封筒に入った分厚い手紙のようなものが同封されていたからで、奥さんの文面はただ便箋一枚に書かれたメモだった。それには、

「主人のものを整理していたらあなた様宛の手紙のようなものが出てきたので、そのまま同封します」とだけ書かれている。同封されていた白い封筒の表には、すみのほうに私の名前が鉛筆で走り書きしてあった。封筒はしっかりと糊付けされていた。その封筒には住所も何もないことから、すぐに投函するつもりではなかったことがうかがえる。

便箋五枚ほどに手書きの小さな文字がぎっしり詰

まっていた。それには、最近の自分の健康状態が思わしくないこと、そのことに関して自分にはある考えがあること。そしてそう考えるに至った理由などが詳しく書いてあった。

永瀬が「最近の」と書いているのは、手紙の最後にある日付から、死のひと月くらい前と思われる。手紙には、誰にもいっていないが健康状態は非常によくないとあった。そして、自分の予想では内臓の

どこか、それも広い範囲にわたって癌になっていると思うというのである。医者には行かず、本屋などで癌に関する本を立ち読みして得た情報によると間違いないと書いてある。当然ながら相当の疼痛に苦しんだようなのだが、一年位前に罹った帯状疱疹のときに病院で貰った鎮痛剤や、歯医者でもらった痛み止めがたくさん余っていたので、それを飲んで我慢したらしい。そんなもので耐えられるものなのだ

ろうか。また、家族に気付かれないようにするために、痛みが襲ってくると、書斎に入ってヘッドホーンの音量を上げて音楽を聞いたのだそうだ。

何故医者に行かないのかについても書かれていた。その半年以上前に高校時代の同窓会があり、永瀬はそれに出席したようだ。その同窓会のことは私も知っていたが、仕事の都合で出席できなかった。というより、私は高校の同窓会には、遠隔地にいたこと

もあってほとんど出たことはなかった。永瀬はいつも出ていたのだろうか。とにかくその同窓会で、永瀬が長崎という女性から聞いた話が書かれている。彼女は、私たちの同級生で、永瀬は彼女のことを好きだったのを私も知っている。今のように高校生同士が誰でもおおっぴらに付き合うという時代ではなかったので、真面目学生だった永瀬は気持ちを自分の中にしまったままであった。永瀬の彼女への淡い

恋は、なんの発展もせずそれぞれ別の人生を歩んだのだった。半世紀近くも遠い昔の話である。

彼女は、自分は癌に罹っていてもう長くないらしいのだが、入院などせずに、つまりただ生きながらえるような方策は一切拒否して、生きている限り最後まで絵を描きつづけたい、描いている最中にキャンバスの上に倒れこんで死ねたら本望だと、彼に話したのだそうだ。そのとき彼女は、ある弦楽四重奏

団を主宰して活動していた女性ヴァイオリニストが、四重奏の地方公演が終わったその夜ホテルで倒れ、その数日後に亡くなったという話を例に出して、自分もそのような最後を迎えたいといったのだそうだ。そのエピソードは私も聞いたことがある。たしかそのヴァイオリニストも自分が癌に罹っていることは知っていて、治療よりも演奏活動を続けることを選んだのだった。

永瀬は、現実に重い病に罹っているという長崎本人から聞いた話は、有名人のエピソードよりもはるかに強烈な印象で、感銘さえ受けたと書いている。そのときの長崎は、少しも悲壮な感じではなかったのだそうだ。長崎が絵を描いていたというのを私は知らなかったし、プロとして書いていたのかどうかも知らない。とにかく、永瀬の文面では彼女にとって絵を描くことはライフワークのようなものであっ

たようだ。
実はそれだけでなく、長崎は永瀬に意外なことを漏らしたのだそうだ。彼女は、永瀬に耳打ちするように、
『もし無事あっちに行けたら、あなたのことを待っていますね。急ぐことはないけど忘れずに私を訪ねてくださいね』
といったのだそうだ。先にも書いたように、永瀬は

確かに長崎に憧れていたし、高校のころは、いつも私にそのことばかりいっていたが、彼女に告白したというようなことは聞いていない。

おそらく何年に一度か開かれていたはずの同窓会で、永瀬と彼女は顔を合わせていて、昔話に花を咲かせていたことだろう。そんな中で、同級生たちから、『お前、長崎が好きだったんだろう』などと冗談交じりの話題が盛り上がっていたのかもしれない。

しかし永瀬自身は、高校時代のことを忘れてはいないが、いまなお彼女に憧れ続けているわけではないと手紙の中で明言している。それでも彼女の耳打ちは永瀬の気持ちに微妙な変化をもたらしたことも確かだったようだ。彼女が待っていてくれると思うと、死ぬことに対して不安はまったくないとも書いているのである。

その同窓会の時点では、永瀬はまだ自分の体調の

異変に気付いていなかったようだが、おかしいと感じ出したのはそれから間もなくだったようだ。そして四か月くらいしたとき、長崎の死を知った。永瀬はその葬儀に出たそうだ。いかにも長崎らしい「お別れの会」だったと永瀬は書いている。そして、その会の間中音量を落として流れていたのが『オセロー』だったというのだ。長崎本人が生前に、自分の告別式にはこの曲をと周囲の誰かにいっていたに違

いないと永瀬は考えたようだ。式場のアイデアだったらおそらくバッハのアリアか何かだろうと、音楽通の永瀬らしい分析も書き添えられている。

そのとき、永瀬は自分もそのように生き、そして死にたいと強く思ったのだそうだ。永瀬にとって、長崎の絵に当たるようなものが何なのか、本人が特にそれについて触れていないのでよくわからないが、私の想像では音楽について書くことではなかったか

と思っている。永瀬とはよく音楽論を戦わせたし、彼は作曲家や演奏家についてずいぶん書きためていたようである。

いずれにしてもこの手紙によって、永瀬がどのように人生の幕引きをしようとしていたのかがわかった。私は永瀬と、死ぬ前日まで普段どおりに暮らして、次の朝起きてこなかったという具合に死ねたら理想的だとか、延命的な治療ほどやって欲しくない

ことはないから、元気なうちに家族にはしっかり頼んでおこうなどと話したことがあるので、永瀬がそう考えることには、特に驚かなかったし、私も同じ考えだ。ただ、現実に病の苦しみに襲われたときに、そのような考え方を実践できるかどうかは、私自身必ずしも自信はないので、永瀬の実践は私の胸にずりと響くものがあった。

永瀬は、そろそろ潮時だと思って自ら幕を引いた

のかもしれない。

私は、このような内容の手紙のことを、奥さんにどう話したらいいのか迷った。長崎のことも、決して夫婦にとって深刻な内容というものではないと思うのだが、奥さんにとっては快くはないだろう。それよりも、夫が文字通り死の苦しみを、永年連れ添った自分に何一つ話さずに、隠れるように死んでいったことは、大きなショックに違いない。しかし別

の考え方をすれば、すでに自殺の事実は知っているので、それ以上大きなショックはないかもしれないとも考えられる。むしろ永瀬の死生観を知ることは、自殺の理由がまったくわからないままというよりもずっといいかも知れない。

私は奥さんに、慎重に言葉を選びながら、死を前にした永瀬が私に当てて書いた文章の内容を説明する手紙を書いた。

間もなく、

「お手紙によって、主人の考え方が理解できました。最後の苦しみを分かち合ってもらえなかったことは残念ですが、主人がそれを最もいいと考えたのですから、やむをえないと思います。おかげさまで、気持ちが楽になってきました。『自分がいなくなっても、充実して楽しい人生を送りなさい』という主人のわたくしへの言葉をよくかみしめながら生きていきた

いと思います」
という内容の返事を貰った。私はホッとした。

私は、ふたたび普段の忙しい生活に戻っていったが、それ以来『オセロー』をよく聞くようになった。永瀬が最後のころこれを聞いていたのは、押し寄せる疼痛を和らげるためではなく、天国で待っているという彼女のイメージを『オセロー』の音楽の中に

追い求めたような気がしてくるのだった。

『オセロー』はいうまでもなくシェイクスピアの四大悲劇の一つである。武将オセローとその妻をめぐる疑惑と誤解と死のドラマで、最後は妻を手にかけたオセローも自刃するというどろどろした物語である。しかし、その物語に霊感を受けて作曲したドヴォルジャークの音楽の響きはあまりにも美しい。作曲者は、この物語の血なまぐさい場面ではなく、

愛と不安そして後悔など主人公の心の動きを音に映そうとしたのだろう。

あれから五年、私はしばらく聞かなくなっていた『オセロー』をまた聞いている。

こんどは、私があのときの永瀬と似たような立場で聞くことになってしまった。といっても私の場合は、本屋での立ち読みではなく、勤め先の集団検診

で大腸癌の疑いがかけられたのだ。病院で詳しい検査を受けるようにとの指示に、深く考えもしないで従ったのが運のつきだった。癌は、大腸だけでなく膵臓にも見つかった。かなり進んでいるとのことだった。治療に関していろいろな可能性を説明されたが、どの方法をとっても治癒は困難で、進行を多少でも遅らせることができるだけということであった。もちろんそれも入院による闘病生活が条件であった。

健康診断の結果が出る日まで普段どおりの生活をしていた人間が、急に入院生活が必要だといわれ、しかも治ることはないだろうというのだ。病気というものはこのようにある日突然覆いかぶさってくるものらしい。これまでの私は、入院はおろか大きな病気に罹ったこともなかった。

永瀬の場合と違って、私の癌は自分ひとりの秘密ではなく、家族はもちろん、職場でも公然のことと

なった。私は当然、普段どおりに自分のやりたいことをしながら最後の日を迎えたいと思っていたのだが、周囲がそれを許してくれない。治療の効果がどうであれ、医者が最善という方法に従うこととなってしまった。医者が最善というのは、ただ単純に一日でも長く生きるということなのだ。そこには、当人である私が、死までの期間をどのように過ごすかというファクターは考慮されていない。医者も家族

も、私の病気を知ってしまった以上、たとえば痛みだけを抑えて何も治療はしないというような選択肢をとることはできないのだ。

体調の異常を隠し通した永瀬は別としても、長崎やエピソードのヴァイオリニストがあのような最後を迎えることをどうやって周囲に納得させたのか知りたいものだ。

猛烈な吐き気を伴う副作用に耐え、もともと少な

くなっていたといえ頭髪はすっかり抜け落ちてしまった。多少気分がいいときに音楽を聞くか、新聞を読むくらいが私のすることの全てであった。入院が決まったときには、パソコンを持ち込んで何か研究してきたことを書こうとも考えたが、いざ入院のドサクサや検査ラッシュが始まるとすっかり病人になってしまった。そしてまもなく副作用が私を痛めつけだしたのだ。

いま私は、かねてから理想と思ってきた、自分の死に方についての考えを実践することができないまま、病院のベッドに横たわっている。これが自分の体かとびっくりするほど、すごい勢いでやせ細っていく。永瀬のように何も治療をしなかったら、もっと早くこうなっていたのだろうか。検査結果が出るまでなんともなかったというのに。とても信じられないことだ。

そんな中でも、私は少し病院生活に慣れてきたので、ノートパソコンを持ってきてもらった。はじめはこれまでの研究生活について随想でも書こうかと思ったのだが、いざワープロに向かうとそんな気にもなれず、今回の入院にまつわることをだらだらと書いてきたという次第である。

疲れてきた、『オセロー』を聞こう。家内がどっさ

りディスクを持ってきてくれているが、いまはこの音楽だけが無類の美しさで私の心に響いてくる。

（完）

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

※2 ペンネーム「中山俊文」について

著者、山中與隆は、過去において「小説家になろう」のサイトに「中山俊文」のペンネームで投稿し

ていた時期がありました。また別場所ではその他のペンネームも使用していたようです。一連の作品の出版開始に当たっては、著者名はデータ管理上一つに統一するべきとのことで「山中與隆」に統一しております。しかし、例外として今回続けて出します五つの短編については、過去におけるウェブ上発表の事例がありますので、本の中では著者名を「中山俊文」とさせていただいておりますことをここに記

します。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

オセロー

2022年6月20日 初版発行
著者 山中與隆
編集発行 山中伶子
表紙素材元
illustAC/photoAC/silhouetteAC
タイトル:青空と十字架 01
作者:Image＊ゆず＊さん
素材のID:2389332
タイトル: スカート女性
素材のID: 110682
© Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com